整理番号

D－1－1　　316

標 題 名

農事試験成績要報第４号
水稲播種量の適量

著 者 名

吉川祐輝

発行者名

農商務省農事試験場

発 行 年

明治 33 年(1900 年)

製作年月

2019年10月

掘建

明治三十三年二月

農事試驗成蹟要報

第四號

水稻播種の適量

農商務省農事試驗場

本報は本場技師吉川祐輝をして調査編纂せしめたるものに係り本支場に於て累年施行せる試驗の結果に基き水稻播種の適量を記述せるものなり

明治三十三年二月

農商務省農事試驗場

水稻播種の適量

凡そ作物は多く日光を受け空氣の流通宜しきときは善く生育し收穫多きものにして此理によりて推し考ふるときは稻苗の如きも種子を厚播にして作るよりも薄播にして作る方善しとすべきなり

然れども農業上の事は單一なる學理によりて斷定し難きものなるを以て農事試驗場本支場に於て數年間播種量試驗を施行し鹽水撰種子を用ひ一步に付き一合播より一升播までの苗を作り之を本田に移植して其生育及收量を調査したるに略ゝ其標準となすべき結果を得たれば左に其成蹟の一斑を記して農家實行上の參考に供す

一、試驗の成蹟

水稻播種量に就きて行へる試驗の成蹟は土地、氣候、稻の種類、肥培等の異なれるに從ひ多少の差異ありて悉く同一轍に出でたりと云ふを得ずと雖も今

其小異を捨て、大体を取るときは概略左の如し

一、薄播の苗は厚播の苗よりも剛くして草丈長く莖大きく葉の幅廣し又一合播の苗は移植の時概ね一本乃至數本の分蘖を有す

二、薄播の稻は厚播の稻よりも出穗及成熟早く一合播と一升播との間には通常數日の差あり

三、薄播の稻は厚播の稻よりも米の收量多し明治二十七年より同三十三年一月までに本支場に於て調査したる成蹟により一合播及二合播、三合播及四合播、五合播及六合播並に八合播及一升播の各平均一反歩當り玄米收量を算出すれば左の如し（七合播と九合播とは試驗回數甚だ少なきを以て此計算に加へず）

一合播及二合播平均	二、四〇二石
三合播及四合播平均	二、三二六

五合播及六合播平均　二、三〇七

八合播及一升播平均　二、二八六

而して實際の收量は土地、氣候、稻の種類、肥培等の異なれるが爲め甲成蹟と乙成蹟との間に大差あるを以て直ちに之を平均するは稍〻穩當ならざるの嫌あり由て各成蹟を通じて五合播の收量を百として他の收量の割合を算出し更に前の如く平均數を算出すれば左の如し

一合播及二合播平均　一〇二、二

三合播及四合播平均　一〇〇、八

五合播及六合播平均　一〇〇、五

八合播及一升播平均　九八、六

又試みに明治二十九年より仝三十二年までに發表したる府縣農事試驗場、府縣農學校及府縣農會農事試驗場の試驗成蹟書に就き水稻播種量試驗の成蹟を

調査するに大体に於て前記の成蹟と符合するを認む即ち左の如し

	一反歩當り玄米收量	五合播收量を一〇〇として算出せる收量の割合
一合播及二合播平均	二、六一二石	一〇三、九
三合播及四合播平均	二、五九三	一〇〇、六
五合播及六合播平均	二、五五三	九九、〇
八合播及一升播平均	二、四六四	九七、六

則ち此等の成蹟は大体に於て初めに述べたる學理と一致するを見るなり而して玄米收量の割合に關する兩表に據れば三合播及四合播と五合播及六合播との間の差は小なれども一合播及二合播と三合播及四合播との間並五合播及六合播と八合播及一升播との間の差は稍〻大なりとす

二、結　論

以上の成蹟に基き結論を下せば左の如し

一、通常水稻は種子を薄播するに從ひ米の收量多しと雖も一步の播種量三合以內なるときは苗代の面積を要すること多く從て整地、肥料等の費用亦多きにより經濟上、却て不利となることあるを以て實業上播種量の適度は一步に付き精撰種子三合以上六合以下とす但し特殊の場合は此限りにあらず

二、一步に付き三合より六合までの範圍內に於ける最も適當なる播種量は土地、氣候、稻の種類、肥培等によりて異なれるを以て其情況の如何によりて多少の參酌を加ふること必要なりとす

明治三十三年三月七日印刷
仝　年三月十日發行

農商務省農事試驗場
（東京西ヶ原）

印刷者　東京市京橋區山城町六番地　堀田道貫
仝所
印刷所　堀田印刷所

植物防疫資料館
C-11-007
農業技術研究所
寄贈
D
1-1
316